

都道府県別賞一等

おばあちゃんが教えてくれたこと

沖縄県 沖縄尚学高等学校附属中学校 三学年

大城 莉里香

私のおばあちゃんは昔、生命保険会社の営業職員として十八年の間働いていました。おばあちゃんはそれまで体が弱く、何度も入院や手術をしていました。ですが、おばあちゃんは生命保険に入っていなかったのです、おじいちゃんが医療費を全額払っていたのです。おばあちゃんが知り合いの紹介で保険会社に入社して最初にしたこととは、自分が生命保険に入ることだったそうです。おばあちゃんは今までの経験から、生命保険の大切さを身に染みて感じていました。それからというものの、おばあちゃんは大きな病気をしないで働き続けることができたのです。なぜおばあちゃんがそんなにがんばれたのか不思議に思い、聞いたことがあります。そのとき、おばあちゃんはこう答えました。

「お客様が喜んでくれたり、感謝してくれることに生きがいを感じたのよ。」それを聞いてからは、私は生命保険について興味を持ち始めました。おばあちゃんに様々なことを尋ね、生命保険について少しでも多く知ろうとしました。そもそも生命保険とは何なのか、生命保険はなぜあるのか、生命保険に助けられた人はいたのか。私の疑問に、おばあちゃんは全て答えてくれました。おばあちゃんの答えは、生命保険への思いであふれていました。特に印象深かった話を紹介しようと思います。

おばあちゃんのお客さんが、あるとき胆石の手術をしました。その人は、この経験から生命保険の大切さを知ったそうで、同業者の方を紹介してくれたそうです。紹介された人はすぐに加入してくれました。その人は健康だったのですが、三年経ってからガンになり、そのまま帰らぬ人となってしまったのです。その方には奥さんがいたのですが、奥さんは御主人の事業の借金に心を痛めていました。しかし、御主人の死亡保険金を受け取れたので借金を整理することができたのです。そのことで心が軽くなったのか元気になり、残ったお金で息子さんの保険に加入したのだそうです。きっとこの人も、生命保険の大切さに気づいたのだと思います。他にもいくつかの話を知っていたのですが、私はこの話から生命保険が周りの人に及ぼす影響について深く考えさせられました。生命保険は本人だけではなく、その周りの家族のことも守っているということが分かりました。おばあちゃんが語ってくれたように、

「私たちの人生は良いことばかりではなく、何が起るかわからない。生命保険は、その何かが起きたときのためのもの。そのときに助けとなるもの」

第54回中学生作文コンクール

なんだと納得することができました。

私は、この経験を通して生命保険への考え方や感じ方を改めることができました。今まで私は生命保険について深く考えたこともなかったですし、生命保険のことを何も分かっていなかったです。そんな何かが起こることなんてほとんどないだろうから、なくてもいいんじゃないかと軽視していました。ただお金を払っているだけで、私たちに利益なんてほとんどない、そういう思い込みをしていたのです。でも今では、生命保険は私たちに何かあったときに助けてくれるヒーローみたいなものだと思えることができるようになりました。私はこれからもおばあちゃんが教えてくれたことを忘れずに生活したいと思います。

今こそみなさんも、生命保険への考え方を改めてみませんか。